

連 載

IT と医療 遠隔画像診断クリニックの現状

石垣 武男

健康文化 41号（2006年10月）で遠隔画像診断の話をしました。今回は多少重複する箇所もありますがその後のクリニックの進展の状況とITを駆使したと言える新しい診療体系のこれからについて述べることにします。

放射線科・名古屋広小路クリニックは遠隔読影業務を主とする施設として平成14年7月に業務を開始しました。クリニックといっても患者さんを診ることはほとんどなく業務主体は画像診断です。依頼病院で発生したCT、MRI、核医学検査、PET/CT、PET画像、マンモグラフィ（乳房エックス線検査）などの読影や人間ドック、検診機関からの胸部写真、上部消化管造影写真、マンモグラフィなどの読影であります。画像診断の依頼が来る病院は色々です。全部で30数施設ですが病床数が500以上の大病院が5施設、300～400床の病院が6施設含まれます。こういう病院では放射線科の専門医が勤務しているのですが医師の数が不足してすべてをこなす切れない状態なのです。専門医のいない病院や開業医からも依頼は来ます。名古屋市内、近郊都市が主ですが県外では長野北部、千葉の施設からも依頼を受けています。実際に画像フィルムを持ち込む必要はないので海外からでも受けることは可能なのです。

当クリニックでは初年度は半年で3800件であった総読影件数は順調に伸びており、2008年には年間19万件を超えた数に達しています。

クリニックには画像を診断するためのモニタが6台設置され目的に合わせて使用されています。一日の読影は一人の医師が6時間前後行います。通常の病院や診療所のように患者さんを診るわけではないので勤務体系はかなり自由です。もちろん緊急の依頼に対応する体制は整えないといけません。その日のうちに決められた件数をこなせばいいからです。早朝来て昼過ぎに終わっても、午後から出勤して夜まで仕事をして、土曜日、日曜日に画像診断業務を行ってもいいわけなので個人の生活環境により選択ができます。診断業務ですから一人黙々とモニタに向かい、一件ずつ画像を見ながら診断結果を入力していきます。ですからクリニック内に入ると静まりかえった雰囲気、人声はほとんどしません。捉え方によっては異様な感じがするかもしれません。

クリニックに来て診断業務を行う他に自宅に回線を敷いてモニタを貸与されて仕事をすることも出来ます。ネット環境はクリニックに比べると劣るので画像がモニタに表示されるのに時間がかかりクリニックで行うようには効率良く行きませんが自宅でできるということには大きなメリットがあります。現在8名前後は自宅での読影業務が主体で、女性医師が半数以上を占めます。2人は千葉県在住です。

読影医は常勤および非常勤医ともに日本医学放射線学会の専門医です。一人が一日でこなす件数はクリニックの常勤医でCT・MRIで換算すると60件前後です。対象となる1件の内容の難易度が違えばもちろん処理できる数は変わってくることは言うまでもありません。またCT、MRIでは1件当たりの画像枚数の違いで読影時間が異なってきます。最近のCT装置は性能が格段とアップし頭の先から爪先まで全身を撮影するのでも1分以内で行えます。そのため送られてくる画像の枚数も最近増えています。1件当たり100画像前後が最も多いのですが200画像以上が全体の約4分の1を占めており1000画像を超える場合もあります。こうなると1件こなすのにだいぶ時間がかかります。症例により診断医の負担に見合うような適切な対応を検討する必要に迫られています。

患者さんに直接接しないで画像だけしかみないのは確かに若い放射線科医にとっては苦痛な場合も多いと思います。しかし画像を通じて患者さんの「顔」が見えるというのも事実です。最近では高齢の患者さんの画像が増えており90歳以上でも決して珍しくありません。年齢が進むにつれて生理的にせよ病的にせよ何らかの異常所見が見つかる頻度は増えます。それでも90歳以上で肺のCTで何も異常がない場合などはほっとすると同時にこの患者さんはどういう生活環境でこれまで過ごしてきたのかと思いを馳せることもしばしばです。

遠隔画像診断業務で最も重要なことは正確な診断を迅速に返信することですがこれにはクリニックの読影体制の充実がなければ達成できません。しかしここでも医師不足は深刻な問題となっています。快適な読影診断が行えるように読影環境を整備することは言うまでもなく読影に対する各自へのインセンティブの充実が必須であります。読影センタの役割としては読影専門医の不足を補い良質な医療を提供する手助けとしての役目は重要です。いつでもどこでも診断が出来、社会還元のみならず自らの生活の糧にもなるという点では第一線を退いたシルバー放射線科医の活躍する場として捕らえることができるのも大きなメリットと言えます。

(放射線科・名古屋広小路クリニック、副院長)